

「ダンカン・キャンベル」について

井 上 清 子

On “Duncan Campbell”

Kiyoko Inoue

ブロードサイド・バラッド「ダンカン・キャンベル」(“Duncan Campbell”)は、エディンバラ(Edinburgh)の町で、警官にアイルランド人(Paddy)と誤認されたスコットランド高地地方(Highlands)の男性を主人公としている。そのバラッドは、「アイルランドよ 永遠なれ」(“Erin-Go-Bragh”)、「ダンカン・キャンベル、もしくは、アイルランドよ 永遠なれ」(“Duncan Campbell, or Erin-Go-Bragh”)とも称されるが、主人公の名や内容から、恐らくはスコットランドで作られたものと考えられる。それは、19世紀後半を中心に人気があったようであり、スコットランドやイングランドに、口承のものも含め多数の版(version)が現存する。

「ダンカン・キャンベル」はエディンバラを舞台とするが、当該のバラッドが流布されたと思われる時代のスコットランドは、農業改革や工業化がほぼ一定の水準まで達成され、人口が増加する中で、旧来の社会が崩壊し、急速に近代国家に向かうという、極めて不安定かつ流動的な状況にあった。

18世紀後半に開始された、生産様式の機械化と輸送網の整備、それに伴う都市の増加と発展に応じて、人々はその間、新たな雇用や生活水準の向上を求めて国内外に移住している。更にスコットランド人の移動に加えて、同国は、これも雇用と生活のために、アイルランドから一特に1845年以降数年に及んだ大飢饉の後、流入

する夥しい数に上る移民を迎え入れており、二重の意味で混乱期にあったと言える。

19世紀を通して、スコットランドでは経済の発展と拡張が続いた。しかし、商工業の中心地帯から遠く離れた高地地方は、そういった流れから取り残される運命にあった。またアイルランドも、12世紀以降実質的にはイングランドの支配下にあつて、経済の後進を余儀なくされてきた。

スコットランドとアイルランドは、本来ケルト文化を共有し、交流の歴史は長い。しかるに19世紀の高地地方とアイルランドは、連合王国内で最も貧しい地域と見なされており、イングランドはもとより、スコットランドにおいても低地地方(Lowlands)とは異質の存在であった。従つて、生存のために雇用を求めて流入する多数の高地地方人(Highlander)やアイルランド人移民に対して、低地地方の人々はある種偏見の目を向けることが多かった。

また高地地方とアイルランドから、共に雇用を求めて低地地方の都市部を中心に移住した人々は、不熟練もしくは半熟練労働者として、求職の折や労働の場で、競合し対立する関係にあった。

今、そのような現実を踏まえて「ダンカン・キャンベル」を見る時、このバラッドには、民衆の娯楽のために世に出されてはいるものの、高地地方人であるダンカンの、低地地方の人々や権力側の代弁者たる警官、更にはアイルラン

ド人移住者に対する、屈折した心情が歌い込まれているように思われる。

I

スコットランド「高地地方」は、正確には、地図上でダンバートン (Dumbarton) とストーンヘイヴン (Stonehaven) を結ぶ線の北西部にあたる地域である。因みに、その線より南東部は低地地方と称される。「高地地方」が最初に語彙として記録され、特定の概念を与えられたのは1400年頃であった¹。それ以前から、スコットランドの北部と南部という地理上の区分はなされてきたが、15世紀に至って、高地地方が文化や社会といった面で、スコットランドの他とは異なる、ひとつの地域として扱われる必要が生じたからである。

山地の多い荒涼とした地形の中で、スコットランド古来のゲール語 (Gaelic) が話され、族長 (clan chief) を中心とする氏族社会 (clanship) が根付いていた同地方は、低地地方でゲール語が使用されなくなり、イングランドへの同化が進むにつれて、言語はもとより文化的にも社会的にも、スコットランドで孤立した存在となった。また近世の初めには、スコットランド統一国家形成の過程において、なおも氏族間の対立や産業の後進性の目立つ同地方の不安定な状況は、その障害になると見なされた。

スコットランドはその後、1603年の王位統合、1707年の国会閉鎖を経てイングランドと合邦し、近代国家への道を歩み始めるが、高地地方には伝統的な文化や社会が温存された。

そのような高地地方社会の解体の大きな要因となったのは、ステュアート王家再興を図るべく起こされた、1715年と1745年のジェームズII世派 (Jacobite) の反乱である。最終的に反乱は鎮圧され失敗に終るが、それは、イギリス国体、中でも宗教改革以来の伝統である、プロテスタント教徒による王位継承を打倒する可能性を持つものであった。

高地地方の氏族の多くが反乱を支持したことが、国家による同地方への報復と弾圧を招いた。中でも1746年に制定された「武装解除法」 (Disarming Act) は、兵士を除く高地地方住

民の総てに、武器の携行を禁じただけでなく、高地地方に伝統的な衣服や模様 (kilt; tartan) などの着用や使用を禁じている。

しかし、実質的に国家の政策よりも、高地地方の崩壊に大きな影響を与えたのは、イギリス市場の力であった²。イギリス経済が発展する中で、1760年代及び1770年代には、牛や羊、海藻灰 (kelp)、ウイスキー、木材、スレートなど、高地地方の生産物に対する需要が急激に拡大している。

商業化の波は、それ以前からも高地地方の氏族社会を少しずつ風化させてきたが、この時点に至って地主でもある族長の姿勢が激変した。彼らは所有地を、市場向けの商品作物の生産と新たな利潤追求に向けて、転換し始めたのである。また地主は、イングランドや低地地方の文化と接する中で、その富裕層の生活様式を志向するようになり、収入増大の必要にも迫られていた。

従って、18世紀中頃から借地料の値上げが加速的になっている。その支払いのためであって高地地方の借地農民は、農業改革の達成によって飛躍的に生産高が上昇した、低地地方の農家の収穫時に、季節労働者として出向くようになっていた³。収穫のための季節的移住は、早くも18世紀初めに、高地地方、特にアーガイル (Argyll) の青年男子によって開始されているが、同世紀中頃以降急増した。折から高地地方では人口が増加しており、人々は農業のみならず、漁業、道路や運河後には鉄道の建設工事、工業、軍隊などにも一時的な雇用を求めている。

やがて土地は入札によって、最高の借地料を付けた者に貸されるようになった。また、従来の慣習として、借地人が借地の一部を又貸しすることを、地主は1830年頃までに全面的に禁止するに至っている。最終的に地主にとっては、広い土地を一括して単一の借地人に貸す方が有利であり、そのため農地の整備が進められた。更に地主は利潤拡大のため、所有地の牧畜・牧羊地への、特に後者への転換を図った。羊毛は当時、イギリス織物産業の発展によって、需要が拡大していたからである。所有地をまとめて牧羊地とし、南部の業者に貸すことは多額の安定した収入を意味していた。

19世紀に入ると地主は、農地の整備、更には牧羊地への転換のために、従来の借地人に強制的に、他の土地への移動や借地からの退去を求めるようになった。加えて1815年に終結したナポレオン戦争は、戦後の農産物価格の下落を招き、高地地方、中でも特に貧しい北部や西部の経済に大きな影響を与えた。不況の時代にあつて、羊の価格のみが他の産物ほどには下落しなかったことが、地主に商業的な牧羊業への更なる志向を促している。困みに、ナポレオン戦争が終るまでに約3万人の高地地方人が、すでに北アメリカに定住していたとされる。

「立ち退き」(clearance)⁴、即ち地主による借地人の追放に決定的要因となったのは、1846-47年に高地地方に起きた飢饉であった。1846年8月及び9月に、同地方にじゃがいもの胴枯れ病が発生し、当時じゃがいもを主食としていた住民のうち約20万人が深刻な状況に陥っている。飢饉の被害は特に、高地地方北西部沿岸と、オークニー、シェトランド、ヘブリディーズ(Orkney, Shetland, Hebrides)などの北部諸島に大きく、それらの地域では借地人の階層に死者が急増した。

じゃがいもの全滅による飢饉は、高地地方住民に、これまで例を見なかった規模の海外移住を促すことになった⁵。その移住の特徴のひとつは、貧しい人々を対象とする、地主の「援助」による(landlord-assisted emigration)組織的なものであったことである。所有地から貧しい借地人を排除し、完全な立ち退きを達成しようとする地主の手配によって、飢饉の間に1万7000人近くの人が、カナダやオーストラリアに移住している。また、慈善団体の援助による海外移住も行われ、内陸部の教区の中には、飢饉前の人口の約半数が海外に流出した例も見出される。

スコットランド国内に留まった高地地方の住民も、立ち退きによって、あるいは自らの意志で、故郷を離れた。彼らは、折から石炭産業、鉄工業、建設業などが盛んであった低地地方を中心に、恒久的な移住を行っている。飢饉の影響が和らいだ1850年代以降も、高地地方の人口は減少し続けた。

アイルランドが、長期にわたって移民を送出し続けるに至った経緯とその状況、中でもスコ

ットランドへの移住に関しては、すでに述べる機会があった⁶。ただ、高地地方の社会が急速に変化し、その住民が、季節的もしくは恒久的移住に向かった時代は、アイルランドからスコットランドに一特にその低地地方に、流入する移民の増加した時代とほぼ一致しており、スコットランドの国情をある意味で複雑なものにしていると言えよう。

スコットランド王国の母体は、5-6世紀に北アイルランドからスコットランド西岸に侵入した、ケルト系のスコット人が建設したダル・リアダ王国(Dal Riada)である。以来、地理的に極めて近いスコットランドとアイルランドは、政治、経済、文化などの面で交流が絶えることがなかったが、両国は対照的な歴史を持つことになった⁷。

スコットランドは、16世紀の宗教改革、17-18世紀の王位統合・国会閉鎖を経てイングランドと合邦し、19世紀後半には、造船、土木、建築、製鉄、製鋼などの領域で世界有数の工業国となった。一方アイルランドは、12世紀以降実質的にはイングランドの支配下にあり、1690年の反乱の失敗を契機に、イングランドに対して植民地的な従属関係に固定されることになった。そして1801年には、国会閉鎖を経て連合王国に組み込まれるに至っている。

経済の立ち遅れる中で、アイルランドの人々は伝統的に雇用を求めて移住しているが、その最短の地はイギリスであった。イギリスに向けての移住には、北・中部・南のルートがあり⁸、地理的な関係でスコットランドには北のルートが取られた。そのルートによってスコットランドには、アルスター地方とコナハト地方北部(Ulster and North Connacht)から移住が行われている。

両地方からの移民の中で、アルスター地方から移住したアイルランド人長老教会信徒(Presbyterian)にとって、スコットランドは異郷ではなかった⁹。彼らの祖先は17世紀に、イングランドによるアルスター植民政策のもと、エア、ウィグタウン、アーガイル各州(Ayrshire, Wigtownshire, Argyll)を離れたスコットランド人であり、その後も交易、留学、親族などを通して、故国とのつながりが途絶えることはな

かったからである。

19世紀中頃にスコットランドに定住したアイルランド人移民の、約4分の1もしくは5分の1はプロテスタント教徒であり、17世紀にアルスター地方に入植した長老教会信徒の直接の子孫、即ち「戻り移民」(return emigrant)であったとされる。彼らの信仰はもとより、生活様式や習慣はスコットランド人に近いものであった。アルスター地方を中心に、アイルランド人のスコットランド移住は、1780年代以降本格的になっている。

1845年から数年に及んだ、これもじゃがいもの胴枯れ病が原因のアイルランドの大飢饉は、多くの死者と被害を生み、夥しい数に上る人々が、生存のために国外移住を試みた。スコットランドでも、アイルランドからの移民が急増し、1851年には、アイルランド(で出生した)人の数が、スコットランド総人口の7.2%に達している¹⁰。ただ、飢饉後は、アルスター地方からスコットランドへの移民は減少している。

アイルランド人移民はスコットランドにおいて、雇用の見込める如何なる土地にも赴いている。彼らは、季節的移住、定住いずれの場合にも、不熟練もしくは半熟練労働者として雇用されることが多く、その労働の場は、収穫時の農場、道路・運河・鉄道などの建設工事現場、炭坑、港湾、工場などであった。従って彼らは、これも類似の雇用を求める高地地方からの移住者と競合することになった¹¹。

時として、両者の激しい対立が暴動に発展し、地元の警察や軍隊が導入されている。ただ、当時労働の場において、雇用を巡っての、あるいは偏見に基づく民族間の対立は、イングランド人と高地地方人、イングランド人とアイルランド人などの間でも頻繁に生じたようである。

スコットランド高地地方の住民と、スコットランドに移住したアイルランド人移民には、共通点が多かったとされる。ルーツがケルト民族であることを初めとして、伝統的なゲール語とそれに基づく文化が比較的長く維持されたこと、地主による土地支配と多数の借地人の存在、立ち退きによる借地からの退去、主食としてのじゃがいもへの依存、規模は異なるものの、じゃがいもの胴枯れ病による何度にも及ぶ飢饉、経

済の後進性、雇用を求めての移住などである。

そのように共通点も多い両者が、18世紀以降経済の拡張期にあるスコットランドにおいて—高地地方人にとっては自国であり、アイルランド人移民にとっては受け入れ国である—比較的低賃金の雇用を求めて競合し、また共に労働に従事する時、その心情には複雑なものがあったように思われる。

II

「ダンカン・キャンベル」は、現存する諸版から推定して、19世紀中頃以降スコットランドやイングランドに広く流布されていたと思われる。そして、そのバラッドには、ブロードサイドとして印刷・出版された版と、口承から採録された版が見られる。それらは、タイトルによって3種類に分類され、現在入手した限りの版の詳細は、以下の通りである¹²。なお、各々の詞形に加えて、ブロードサイドの版には、所蔵先、版元とその営業年代を、口承の版には、出典、歌い手の名、採録年を記した。また、アルファベットの大文字はブロードサイドの版を、小文字は口承の版を示している。

I. "Duncan Campbell"

- (A) Mu 23-y 1:025, Glasgow University Library (4行連句9連) [stanza]. James Lindsay, Jun., Glasgow. Between 1852 and 1859.
- (B) Mu 23-y 1:068, Glasgow University Library (4行連句9連). James Lindsay, Glasgow. Between 1856 and 1859.
- (C) "My Name Is Duncan Campbell." L.C. 1270 (003), The National Library of Scotland (4行連句9連). James Kay, Glasgow. Between 1840 and 1850.
- (D) L.C. Fol. 70(57b), The National Library of Scotland (4行連句9連). Printer unknown. Between 1880 and 1900.
- (E) Harding B11(3725), Bodleian Library, University of Oxford (4行連句9連). Mary Stephenson, Gateshead. Between 1838 and 1850.
- (F) Harding B20(83), Bodleian Library (4行連句9連). J. Harkness, Preston. Between 1840 and 1866.
- (G) Firth b.26(199), Bodleian Library (4行連句9連). John Ross, Newcastle-on-Tyne. Between

- 1847 and 1852. And may be had of Stewart, Carlisle; and Dalton, York.
- (H) 2806 b.10(198), Bodleian Library (4行連句9連). Printer unknown. Between 1849 and 1880.
- (I) Firth b.25(539), Bodleian Library (4行連句9連). W. M'Call, Liverpool. Between 1857 and 1877.
- (J) 2806 c.14(79), Bodleian Library (4行連句9連). Printer unknown.
- (K) Harding B11(1026), Bodleian Library (4行連句9連). Printer unknown.
- (a) *The Greig-Duncan Folk-Song Collection*, No.236: B(4行連句9連). With the tune, Mrs Margaret Gillespie. Learnt from James Buchan about 1850. Noted 1905.
- II. "Erin-Go-Bragh"
- (L) 2806 c.16(328) & Harding B16(82a), Bodleian Library, University of Oxford(4行連句8連). Swindells, Manchester. Between 1780 and 1853.
- (M) Harding B11(1084), Bodleian Library (4行連句7連). H.P. Such, London. Between 1863 and 1885.
- (N) Firth c.26(15), Bodleian Library (4行連句9連). John O. Bebbington, Manchester & J. Beaumont, Leeds. c. 1850.
- (O) Robert Ford (ed.), *Vagabond Songs and Ballads of Scotland*, 2vols. (Paisley, 1899-1901), I, 47-49 (4行連句9連). With the tune.
- (b) Gavin Greig, "Folk-Song of the North-East." CXXVII(4行連句8連).
- (c) *The Greig-Duncan Folk-Song Collection*, No. 236: C(4行連句7連). With the tune, T. Towers. Noted by self.
- (d) "Bold Erin-Go-Bragh," *The Greig-Duncan Folk-Song Collection*, No. 236: J(4行連句9連). Source unrecorded. Evidently from Ford's *Vagabond Songs and Ballads*.
- (e) *The Greig-Duncan Folk-Song Collection*, No. 236: K(4行連句8連). J. W. Spence.
- (f) *The Greig-Duncan Folk-Song Collection*, No. 236: L(4行連句7連). Miss Bell Robertson: My brother James sang this one.
- (g) *The Greig-Duncan Folk-Song Collection*, No. 236: M(4行連句5連). Mrs Rettie.
- III. "Duncan Campbell, or Erin-Go-Bragh"
- (h) *The Greig-Duncan Folk-Song Collection*, No. 236: A(4行連句10連). With the tune, Alexander Troup. From his father, who sang only nine verses; the fragment of verse 10 Mr Troup gives from print; Isaac Troup, noted 3rd September 1908.

因みに、Oの版(以下、バラッドの各版を上掲のアルファベットで表記)は、ブロードサイ

ドが出典であると考えられるが、フォード(Ford)は典拠を示していない。グレッグ・ダンカン(Greig-Duncan)の収集には、「アイルランドよ 永遠なれ」のタイトルで、1連のみの断片的なものの3版、及び旋律(tune)のみのものの3版が、「ダンカン・キャンベル、もしくは、アイルランドよ 永遠なれ」のタイトルで、旋律のみのものの1版が、各々掲載されている。

また、ロウズ(G. Malcolm Laws)は¹³、イギリスのブロードサイド・バラッドに由来するアメリカのバラッドとして、当該のバラッドを採り上げ、「ダンカン・キャンベル(アイルランドよ 永遠なれ)」として、Q20のバラッド番号を与えている。更に彼は、そのバラッドの要旨と第1連を掲載し、当該のバラッドがカナダのノヴァ・スコシア(Nova Scotia)などにも見出されるとしている。

上掲のブロードサイド及び口承の版の、主な異同は後述するが、このバラッドが、本来ブロードサイドとして世に出され、その一部が口承されるに至ったことは、各版の詞句の比較において明らかである。原典が文字化されている故か、K・L・Mの版を例外として、物語の流れや詞句は概ね一致している。

因みに、Aの版の大意訳は、次の通りである:

第1連 「私の名前はダンカン・キャンベル、アーガイル州(Shire of Argyll)の生まれだ。この国を何マイルも旅したし、イングランドやアイルランドも旅して回ったことがある。大胆不敵な『アイルランドよ 永遠なれ』という名前だね。

第2連 「ある晩エディンバラ(auld Reekie)の通りを歩いていて、横柄な(saucy)警官に出会ったら、奴は私の顔を睨みつけ、尋問を始めたという訳だ。『おまえは、何時アイルランド(Erin go Bragh)から来たのかね。』

第3連 「『私はパディ(アイルランド人、Paddy)ではないよ。アイルランド(Ireland)に行ったことはあるけれど。ほんとに私はパディでないよ。アイルランドに行ったことはあるけれど。ところで、私がパディだとしても、それがどうしたというのかね。アイルランドから

は、勇敢な英雄が一杯出ているよ。』

第4連 『おまえがパディ (Pat) であることは、すでにお見通し。その髪の刈り方でな。おまえらは皆、ここに来ると、すぐスコットランド人に化けるのだ。法律を破るために国 (your own country) を出るのさ。アイルランドから来たよそ者 (strangers) は総て逮捕する。』

第5連 『私がパディで、それがほんとだったとしても、仮に私が悪魔だったとしても、それでどうだということのかね。その手に (in your paw) 棍棒がなかったら、アイルランドの芸当 (game play'd in Erin go Bragh) を見せてやる。』

第6連 「私は李の木の杖 (blackthorn) を握りしめ、相手の巨体を横殴り。奴の頭 (napper) から血が吹き出して、それで大急ぎ退散を決めこんだ。アイルランドのためにお返しをしたまでさ。

第7連 「私の周りに、人が雁 (wild geese) のように群がって、口々に喚くのは、『その呪われた悪漢 (d_d rascal) を捕まえろ。町の警官が殺された。』私の友が一人としたら、警官の友達は何人いるようだ。『アイルランドよ 永遠なれ』も一大危機というところ。

第8連 「何とかフォースの入り江 (Forth) まで逃げのびて、小さな船 (wee boatie) を見つけたよ。持ち物全部積み込んで、北に向けて船出した。『エディンバラよ、さようなら。警官や皆とも、おさらばだ。悪魔に傍にいてもらえ。』『アイルランドよ 永遠なれ』は、そう言った。

第9連 「おいで、皆さん、勇敢な方々よ。この歌を聞いとくれ。皆が、どこの人 (to where you belong) でもかまわない。私は、堂々たるあの高地 (in the Highlands so braw)、アーガイルの生まれだよ。『アイルランドよ 永遠なれ』と呼ばれても、ちっとも嫌な気はしないがね (ne'er took it ill)。』

*

詞句に見られる“Erin”は、古アイルランド語 (ゲール語) に由来するアイルランドの古名である。また“auld Reekie”は、19世紀に用いられたエディンバラのニックネームである。

スコットランド方言の“reekie,”即ち「煙で汚れた、煤だらけの」に由来するが²⁴、当時薪や石炭の煤煙で煤けていたエディンバラを連想させる。

“Paddy”は、アイルランド語の男性名“Padraig” (英語でPatrickにあたる) に由来し、当該のバラッドが流布されていた時代には、「アイルランド人カトリック教徒借地 (小作) 農民」というステレオタイプを暗示する語であった。またその語には、「おどけもの、冗談好き、センチメンタル、貧しい、大酒飲み、喧嘩好き、よく失敗する」といったイメージもあった。

“napper”は、1785年に出版された俗語辞典に掲載されている故に、恐らくはその辞典の出版年代以前から使用されていたと思われる英語の俗語である。“wild geese”は本来、名誉革命の折に退位したジェームズII世に従ってヨーロッパにわたった、アイルランド人ジェームズII世派の人々に与えられたニックネームであった。

**

「ダンカン・キャンベル」は、主人公の名や内容から考えて、スコットランドで作られたと考えられる。また、ブロードサイド・バラッドの版元の営業年代から推定して、現存する版が1850年までに、スコットランドやイングランドの人々に知られていたことは確かであろう。加えて、口承の版の歌手の言葉に従えば、1850年頃すでにスコットランド北東部において、旋律にあわせて歌われていたようである。

タイトルに関しては、ブロードサイド・バラッドとして出版された版の約7割が「ダンカン・キャンベル」であり、対して口承の版は、断片的なものも含めて約7割が「アイルランドよ 永遠なれ」である。

このバラッドは、ブロードサイドとして各地で印刷・出版され、また、それらが口承されるという性質上、前掲の幾版かに見られるように、連の欠落や多少の詞句の変容が生じることは、やむを得ないと思われる。しかし、その大半はすでに述べたように、K・L・Mの版を例外とし

て、バラッド自体の内容を左右するほどのものではない。

K・L・Mの3版のうち、当該のバラッドの原形と最も異同の大きいのはLの版であろう。そして、その版が不完全な形で転載されたものが、Mの版であると考えられる。両版は、他の総ての版が主人公をアーガイル州生まれのダンカン・キャンベル、高地地方の人としているのに対して、主人公をパット・マーフィー(Pat Murphy)としている。パット・マーフィーは、Lにおいてはなおもアーガイル州生まれとされているが、Mの版では、彼の出生地に関する言及がなく不明である。

パット・マーフィーは、たとえアーガイル州生まれであるとしても、その姓名から推測されるようにアイルランド人である。従ってLとMの版においては、彼は最初からパディとして、エディンバラで警官に尋問されていることになる。両版からは、「ダンカン・キャンベル」が本来持っていた重要な要素たる「高地地方人が警官からパディと誤認される」という点が完全に消去され、バラッド自体が「パディの武勇談」といったものに変容されているのである。

LとMの版は、故に、ダンカンが警官に「自分がパディだったとしても」と反論する箇所(Aの第5連)を抜いており、更に結びの句は特異である。Mの版は結びの句を欠いているが、Lの第8連は、警官(及びバラッドの聞き手)に対するパットの警告として歌われる:「さて、結論を出しておしまいにしよう。パディのお国訛り(his tongue)が聞こえたら、不敵なそいつ(bold Paddy)に気をつけろ。失敬な尋問などしないこと(Ne'er venture to give him unmannerly jaw.)。さもないと、そいつがアイルランドから来たことは(he comes from Erin go Bragh)、すぐ身にしてみて分かるから。」

LとMの版は、「ダンカン・キャンベル」を踏まえて作られた、別のブロードサイド・バラッドと見なすことも可能であろう。興味深いのは、Lの版が出版されたマンチェスターで、似た時期に別の業者が、タイトルはLと同じく「アイルランドよ 永遠なれ」であるが、バラッド自体は本来の「ダンカン・キャンベル」である版(N)を世に出している点である。故に

Lの版は、スウィンデルズ(Swindells)が、同じマンチェスターの同業者ベビントン(Bebbington)に対抗して売り出した「新作」とも考えられる。タイトルを「ダンカン・キャンベル」から「アイルランドよ 永遠なれ」に変えたのは、逆にベビントンのアイディアであったのかもしれない。

因みに、マーフィーという姓はアイルランドに多く¹⁵⁾、その元の形であるマクマーフィー(MacMurphy)姓は、以前アーマー、ティローン両州(Armagh and Tyrone)に多かったと言う。両州はアルスター地方に属し、今日の同地方のマーフィー姓の大半は、元来マクマーフィーであったとされる。L及びMの版におけるマーフィーという姓の呈示も従って、主人公のルーツがスコットランドであることを暗示している可能性もあり、その意味においては、パット・マーフィーはダンカン・キャンベルの分身であるとも考えられる。

Kの版は、第9連第4行目以外は、「ダンカン・キャンベル」の他の版、及びN・O、更に、口承の版で結びの句を持つc・dの版と、殆ど同じである。注目されるのは、Kの版が当該の行で、他の版と逆のことを述べている点である。他の版では、ダンカン・キャンベルは最後に、「『アイルランドよ 永遠なれ』と呼ばれても、ちっとも嫌な気はしない」としている。対してKの版でダンカンは、「『アイルランドよ 永遠なれ』と呼ばれて、いい気はしない」(But I ne'er took it well when called Erin go Bragh)と結論付けている。高地地方の生まれであることを内心誇りとしているであろう彼の、そして他の版に登場するダンカン達の?これが案外本音であったかもしれないのである。

III

「ダンカン・キャンベル」が流布されていた19世紀半ばのスコットランドは、すでに述べたように、近代的工業国へと急速に変貌しつつあった。しかし、同国の経済の拡張と繁栄は、国家としての独立と引き換えに、政治、経済、文化といった殆ど総ての面において優位にあったイングランドと、合邦することによって得られ

たものであった。

従ってスコットランドは、18世紀中頃以降、近代化が進むにつれてイングランドに同化し、自らのアイデンティティを失うという、屈折した状況に置かれていた¹⁶。国家や民族のアイデンティティ喪失というその危機にあって、注目されるに至ったのは、当時なおも伝統的な文化や社会を留めていると見なされた高地地方である。低地地方の上流及び中産階級の人々が、イングランドの生活様式を採り入れ、それに馴染む中で、自らが失ったものを高地地方に求め始めたのであった。

高地地方の衣服や模様が流行し、1778年にはロンドンで「高地地方協会」(Highland Society)が設立されている。同協会は、高地地方の伝統の保存と、1746年制定の武装解除法の撤廃を国会に働きかけることを目的とした。そして1782年には、事実同法の廃止が国会で可決されている。

更には、ナポレオン戦争に出征した高地地方連隊が、高地地方の軍服を着用し勇敢に闘ったことが、「高地地方様式」(Highlandism)の浸透に拍車をかけることになった。そして、1822年のイギリス国王ジョージIV世(George IV)のエディンバラ訪問が、「高地地方様式」を、スコットランド国家及び民族自体のアイデンティティとして、完成させ定着させる上で、決定的な役割を果たした。

一連の歓迎行事が、文人スコット(Sir Walter Scott)の演出のもと、総てがケルト風・高地地方風に行われた。スコットは、国王のエディンバラ訪問が、ゲール人の統合につながることを望んでいたようである。国王もまた、高地地方の正装に身を包んで国民の歓迎に応えた。

この時代には世相を反映して、スコットランドの過去に対する人々の関心が高まり、歴史書や文学作品の出版、口承のバラッドや民話の収集などが盛んに行われている。

1837年に即位したヴィクトリア女王(Victoria)は、長期にわたってイギリス帝国の女帝として君臨したが、その高地地方愛好が、「高地地方様式」に明確な形で王室の承認を与えることになった。女王は、1848年以降毎年秋の休暇を高地地方で過ごし、その習慣が、イギリス君主

と同地方、ひいてはスコットランドとのつながりを深めることになったからである。

しかし、「高地地方様式」は現実には、高地地方がイギリス市場に組み込まれ、商業主義に駆られた地主が借地農民の立ち退きを強行し、まさに伝統的な氏族社会が崩壊しつつあった時代に、それと同時進行的に、高地地方に何の関連性を求めることもなく創造された、いわば虚構の伝統であった。

実態とはうらはらの偽りともいえる伝統が、今は失われた、スコットランドとスコットランド人のアイデンティティ再生のための土台として、低地地方の、とりわけ社会の上層にある人々に承認されたのである。スコットランドにおいて、「常に少数派であり、重んじられることのなかった人々¹⁷」の伝統が、今や栄光あるスコットランド国家とその国民の伝統となった。「高地地方様式」の発明は、高地地方の過去に対する、皮肉ともねじれとも呼び得る現象であった。

アイルランドから雇用を求めてスコットランドに入国する移民は、18世紀以降増加しつつあった。1820年代には、両国を結ぶ航路に蒸気船が導入され、運賃が値下がりしたこともあって、移民数は大幅に増加するに至っている¹⁸。更に、1845年から数年に及んだ大飢饉のため、スコットランドに流入するアイルランド人移民の数は、飛躍的に上昇し続けた。

移民は、雇用の見込める如何なる土地にも赴いたが、グラスゴー(Glasgow)を初めとして、比較的大きな工業都市に集中する傾向があった。受け入れ側社会の、アイルランド人移住者に対する反応は、個々の状況に応じて多様であったようである。しかし、移住者達の貧しさ、劣悪な住環境、人口過密、受け入れ側社会の救済税の負担増、雇用口への競合の不安、カトリック教徒移民に対する不審や偏見といったことが要因となって、移民に対する地元住民の、激しい反感や敵意を招きがちであった。中でも、発疹チフスが「アイルランド熱」(Irish fever)と呼ばれたことに象徴されるように、1830年代及び1840年代にスコットランドで流行し、多数の死者を出したコレラや発疹チフスは、アイルランド人移民が病原であると見なされた。

1840年代及び1850年代には、雇用を求めて、あるいは物乞いのため、スコットランド国内を流浪するアイルランド人が問題視され、1845-54年の間にスコットランド当局は、約4万7000人の貧困者をアイルランドに強制送還している¹⁹。スコットランド主流社会の、アイルランド人移住者に対する敵意や偏見は、警察や司法の姿勢にも反映され、それは19世紀後半まであまり変わることがなかった。

立ち退きや飢饉といった理由で、都市部を中心に移住した高地地方の人々は、アイルランド人移住者と、程度の差はあれ似た状況に置かれていたとも言える。しかし、高地地方人はアイルランド人と比較してかなり少数であり、また遥かに容易に移住先に同化したとされる²⁰。従って、彼らが19世紀後半のスコットランド社会に与えた影響も、アイルランド人移住者のそれよりは相当小さかったようである。

しかし、貧しい生活状況、低賃金労働への従事といったことがアイルランド人移民との共通項になって、スコットランド低地地方の人々の高地地方人に対する偏見は、1850年代になっても消えることはなかった。19世紀半ば、「高地地方様式」がスコットランドにおいて、国家と民族のアイデンティティとして、その地位を確立するに至った時代に、高地地方の真の伝統を生き、その正統な継承者である筈の人々が、「高地地方様式」から完全に除外されていたのである。

ブロードサイド・バラッド「ダンカン・キャンベル」は、1850年代というスコットランドの混乱と激動の時代に、同国に流布されていた。そして、そのバラッドは、スコットランドを何マイルも旅して回った、アーガイル生まれの高地地方人、ダンカン・キャンベルのエディンバラにおける体験を歌っている。

今、そのバラッドを歴史の文脈に照らして見る時、そこには、高地地方人ダンカンの、アイルランド人移民との対比における自身の微妙な位置付けと、屈折した心情が浮かび上がってくるように思われる。

彼は、自ら述べているように、スコットランドを「ダンカン・キャンベル」という本名でなく、大胆不敵な「アイルランドよ 永遠なれ」

という名で旅している。ダンカンとは、道中高地地方人でなく、アイルランド人の勇者をいわば装っており、それは、他者からそのように見誤られた故ではない。あくまで彼自身の意志でそうしているのである。ダンカンとは、スコットランドにおいて同国人から、高地地方人と見られるより、最初からアイルランド人移住者と見られることを望んでいるのであろう。ただ、それは弱腰の移民としてではなく、「大胆不敵」で、相手に一目置かれるような人物としてである。

そしてエディンバラで、彼は、夜の町をうろつく不審者として、警官の尋問を受ける。警官はダンカンの外見から、即パディであると判断している。パディであれば、スコットランド人になりすまして良からぬことをする前に逮捕する必要がある。

警官の横柄で断定的な尋問に対して、確かにダンカンは、自分がパディでないと二度繰り返し、容疑を一見強く否定しているかに見える。しかし彼は、最後まで自らの主張を貫く訳ではない。自身がアーガイル生まれの高地地方人であり、警官と同国人であることを、ダンカンは明かさないままである。

更にダンカンは、「自分がパディであっても、どうということはないだろう。アイルランドは、勇敢な英雄を多数輩出した国である」と、むしろアイルランドを讃えるようなことを言う。彼の言は、この不審者がパディに違いないという警官の確信を、決定的なものにするだけであろう。

加えてダンカンは、アイルランドに伝統的な闘いの流儀で一季の木の杖、即ちシレイラ(shillelah)で警官を殴りつけ、アイルランドのためにお返しをしたと言っている。そして彼は、警官を殺した悪漢として、これもアイルランド人を連想させる雁の群のように集まって来る町の人々に、追われることになる。

何とか船で脱出に成功したダンカンは、最後までアイルランド人であり続けようとするかに見える。エディンバラや警官、そして町の人々に対する悪態めいた別れの言葉をも、「アイルランドよ 永遠なれ」として述べているからである。

バラッドの聞き手は、冒頭で主人公が高地地

方人であることを知っており、従って物語は表面的には、横柄な警官にパディと誤認されたダンカンが、あくまでパディを装い、権力を笠に着る相手を打ちのめすという武勇談に読める。現実には、高地地方人はアイルランド人と似た点がある故に、警官が両者を取り違えた可能性も否定できない。そういったところに、このバラッドの面白さが潜んでいるのであろう。

しかし、自国であるスコットランドを最初から、故意にアイルランド人として旅するダンカンの意図は何か。

当時高地地方は、スコットランドにおいて、社会の進歩に立ち遅れた最も貧しい地域であったという。そして、同国人である低地地方の人々には、なおも高地地方とその住民に対する偏見があったとされる²¹。そのような状況のもと、高地地方人であるダンカンが、逆説的にそれを誇りとするが故に、現実の社会において自身よりも更に逆境にあることの多かったパディを装おう。

低地地方の人々に、自分が高地地方人であることを知られぬよう、ダンカンは、アイルランド人移民の姿を借りる。そして、相手の偏見の目は、高地地方人である自分ではなく、アイルランド人に向けられたものと考えて。彼の心には、そのような意識が働いていたかに思われる。

その変身の埋め合わせとして？ダンカンは、彼をパディと信じて疑わない威圧的な警官に、ことさらにアイルランドのことを擁護し、アイルランドの人々ために報復する。そこにはダンカンの、自己防衛本能と屈折した自尊心や優越感といったものが秘められているように見える。

ダンカンは最後に、バラッドの聞き手に向かって本音を吐露している。「私は、堂々たるあの高地、アーガイルの生まれだよ。『アイルランドよ 永遠なれ』と呼ばれてもちっとも嫌な気はしないがね。」

その言には、19世紀半ば「高地地方様式」がスコットランドの国家と民族のアイデンティティとして独り歩きする中で、本来の正統な継承者でありながらそこから排除され、加えてアイルランド人移住者と似た状況に置かれているダンカンの、屈折してはいるが、それでも高地地

方人であることへの誇りと、なおも断ち難い高地地方への愛着が込められているように思われる。

以上、簡単ではあるが「ダンカン・キャンベル」について述べた。今日に至る歴史の中で、スコットランドの人々は、高地地方・低地地方を問わず、多様な事情や目的のために、生地を離れて移住したという。そして、アイルランドの人々にとっては、アイルランドに生まれることが、即ち故国を離れることを意味していたとされる。そのような文脈に「ダンカン・キャンベル」を置く時、当該のバラッドはある種迫真性を帯び、聞き手であった人々に様々な感慨を抱かせたことであろう。

人が、故郷を出て異なる文化を背景とする人と出会うことは、世の必然であり、故に、ダンカンに似た体験もまた繰り返されるかもしれないのである。

[註]

* 19世紀を中心に、Scotlandの歴史並びに社会の状況に関する記述の全般は、以下を参照した。即ち、T. C. Smout, *A History of the Scottish People 1560-1830* (London, 1972), pbk. edition of the 1969 ed., and *A Century of the Scottish People 1830-1950* (London, 1986); T.M. Devine, *The Scottish Nation 1700-2000* (London, 1999).

Scotlandに向けてのIrelandからの移民に関する記述の全般は、以下を参照した。即ち、James E. Handley, *The Irish in Scotland 1798-1845*, 2nd Edition (Cork, 1945); Martin J. Mitchell, *The Irish in the West of Scotland 1797-1848* (Edinburgh, 1998); Donald M. MacRaild, *Irish Migrants in Modern Britain, 1750-1922* (London & New York, 1999); Graham Davis, "The Irish in Britain, 1815-1939," and Richard B. McCready, "Revising the Irish in Scotland: The Irish in Nineteenth and Early Twentieth-Century Scotland," both in Andy Bielenberg (ed.), *The Irish Diaspora* (Harlow, 2000), pp. 19-50.

1. Highlands, 特にその社会がScotlandにおいてひとつの特徴ある地域と見なされるに至った経緯に関しては、Smout, *A History of the Scottish People 1560-1830*, pp. 39-48; Devine, *ibid.*, pp. 231-45に拠

- る。
2. Highlands 社会の商業化及びそれに伴う変化に関しては、Smout, *ibid.*, pp. 321-28; Devine, *ibid.*, pp. 170-95に拠る。
3. Highlanders の、農産物収穫時の季節労働を初めとする、雇用のための一時的移住に関しては、Handley, *op.cit.*, pp. 36-37; Handley, *The Navy in Scotland* (Cork, 1945), Chaps. II, III, & IV; Devine, *ibid.*, pp. 183-87を参照。
4. Highland Clearances に関する記述の全般は、Smout, *A History*, pp. 328-37, and *A Century*, pp. 62-65; Devine, *ibid.*, pp. 177-78, 180-83; MacRaid, *op.cit.*, p. 167を参照。
5. Highlandsにおける飢饉とそれに伴うHighlandersの移住に関しては、Smout, *A Century*, pp. 12-13; Devine, *ibid.*, pp. 413-19を参照。
6. 拙稿「アイルランドからスコットランドへーバラッドに見る移民の姿」『研究紀要』第41集（県立新潟女子短期大学, 2006年）, pp. 85-100。
7. Scotland と Ireland の関係に関しては、上掲の引用文献の総てが言及しているが、中でも19世紀頃の両国の状況については、MacRaid, *op.cit.*, pp. 29-30に拠る。
8. Davis, *op.cit.*, p. 23.
9. Ulster から Scotland への、特にプロテスタント教徒の移住の全般に関しては、Devine, *op.cit.*, pp. 500-07; Davis, *ibid.*, p. 42; MacRaid, *op.cit.*, pp. 100-22に拠る。
10. MacRaid, *ibid.*, p. 43, Table 2. 1: The Irish-born population of Scotland 1841-1911; Davis, *ibid.*, pp. 38-39.
11. 雇用の場における Highlanders と Ireland からの移民の競合と対立に関しては、Handley, *The Irish in Scotland*, Chaps. II & III; MacRaid, *ibid.*, pp. 167-68を参照。Handley は、この書において、両者を “natural rivals” と述べている (p. 62)。
12. 本稿に掲げた Glasgow University Library, The National Library of Scotland, Bodleian Library, University of Oxford 所蔵のブロードサイド・バラッドの版は、総て電子情報化され公開されている。Greig-Duncan の収集に関しては、Patrick Shuldham-Shaw and Emily B. Lyle (eds.), *The Greig-Duncan Folk-Song Collection*, Vol. 2 (Aberdeen, 1983), pp. 189-97, p. 544; Gavin Greig, “Folk-Song of the North-East,” CXXVII, *Buchan Observer* を参照。
13. G. Malcolm Laws, Jr., *American Balladry From British Broad-sides* (Philadelphia, 1957), p. 282.
14. “auld Reekie”及び“reekie”に関しては、*The Concise Scots Dictionary* (Aberdeen, 1991), p. 21, p. 550; “Paddy”のステレオタイプ及びその歴史的変化に関しては、William H.A. Williams, *'Twas Only an Irishman's Dream* (Urbana & Chicago, 1996), pp. 57-61, p. 237; “napper”に関しては、*The Compact Edition of The Oxford English Dictionary* (Oxford, 1971), I, 1895; “wild geese”に関しては、*The Compact Edition of The Oxford English Dictionary*, II, 3777を参照。
15. Edward MacLysaght, *The Surnames of Ireland* (Dublin, 1973), p. 230.
16. 以下、Highlandism に関する記述の全般は、Devine, *op.cit.*, pp. 231-45, 292-95を参照。
17. Devine, *ibid.*, p. 235. Sir Walter Scott の伝記の著作者である J.G. Lockhart の言が引用されている。
18. 1820年代に Scotland と Ireland を結ぶ航路に蒸気船が導入された経緯と状況に関しては、特に Handley, *The Irish in Scotland*, pp. 23-36が詳述している。
19. Devine, *op.cit.*, p. 491.
20. Andrew G. Newby, *Ireland, Radicalism and the Scottish Highlands, c.1870-1912* (Edinburgh, 2007), pp. 9-12.
21. Devine, *op.cit.*, p. 232, 及び L.C.Fol. 70 (576), The National Library of Scotland の Commentary, <<http://www.nls.uk/broadsides/broadside.cfm/id/14986>>を参照。